薩摩青雲丸
第３号
鹿児島水産高等学校
薩摩青雲丸
指導教官

実習中盤から終盤へ

乗船23日目、総航海距離3000マイル超え

神奈川入港

十一月十三日午前九時、神奈川県三浦市の三崎港に入港しました。入港前日までは今航海最大の揺れを経験し、船内では夜通し色々な物が転がる音が響き渡っていました。中にはベッドから転げ落ちそうになったと話す生徒もいました。入港当日は天候にも恵まれ、山頂に雪化粧をした富士山が出迎えてくれました。

入港前、富士山を後方に本科生（左）専攻科生（左下）＝十一月十三日最上甲板にて

沿岸航海３

十一月十五日には予定通り、三崎港を後にしました。明日十八日には長崎に入港します。今回の乗船実習は、小笠原海底火山噴火による漂流軽石を避けるため、当初の計画を大幅に変更し、沿岸に沿って実施しています。沿岸の海域では造水機を稼働させることができないため、航海間隔を短くして各寄港地で給水を行っています。短距離航海が続いていますが、三級海技士の乗船履歴認定に必要な航海距離（沿岸四千マイル）もようやく達成の目途が立ってきました。

訓練記録簿

乗船履歴に加え本科四級専攻科三級の筆記認定には航海士／機関士の指導の下、訓練記録簿に沿って運航技術を習得することが義務付けられています。本船でも、甲板部／機関部の各士官が通常の運航業務と並行しながら時に時間外で実習生に対する実技訓練や試験、評価、講義にあたっています。生徒達は乗船実習の意義をしっかりと理解し高い目的意識を持って実習に取り組んでもらいたいと思います。

新潟造船工場で建造中の薩摩青雲丸６９７トン

着々と進む代船建造

令和４年竣工予定の薩摩青雲丸

担い手不足にあえぐ海運・水産業界に薩摩青雲丸は、これまで数多の卒業生を輩出してきた。一獲千金の遠洋マグロ延縄漁業や七つの海を股にかける外航船にロマンを抱き熱く語り合ったという思い出話を本校OBから聞いた。時代の移り変わりと共に、社会情勢や生徒達の職業観も一変した。新船竣工を節目に、学習指導要領の改訂や働き方改革の波を受けて実習船教育も大きく変わろうとしている。最新鋭の設備を備え、水産高校実習船の中では国内最大級となる新生「薩摩青雲丸」。生徒に夢や希望を抱かせる洋上の学び舎であり続けたい。

シリーズ第二弾　若き通信士の素顔

本船無線室で通信業務にあたる板敷通信長＝十一月十七日

通信長：板敷佑平（二十八歳）▽平成二十六年本校専攻科修了、同年着任▽若くして本船通信長の重責を担う海上通信のエキスパート▽二級海技士英語講義担当▽好きな言葉は「常勝」しかしギャンブルは弱い▽尾崎豊をこよなく愛す▽特技は作詞作曲▽甘いマスクに加えて、抜群の運動神経とユーモアセンスを自負する▽兄貴分的存在で若手乗組員と生徒達から絶大な信頼を得ている。ただ、友達は少ない。

指導教官の目

指導教官として乗船する度に思うことですが、専攻科生に関しては、実習や作業にあたる際の身のこなしや振る舞いが本科卒業からの短期間で目に見えて変化する様を感じます。家庭や学校を離れ、乗組員との長期船上生活を通して実社会を体感しているのだと思います。本科生についても、目に見えるほどは無くとも、知識や技術の習得以外に海で働くことの厳しさや楽しさを肌で感じて下船してくれることを期待します